NA REPORT

第 18 回日本緩和医療学会学術大会開催
患者，家族，医療従事者にとって幸せな緩和医療を

6 月 21–22 日，パシフィコ横浜（横浜市）にて，東口髙志会長（藤田保衛大）のもと，第 18 回日本緩和医療学会学術大会が開催された。今大会のテーマは「いきいきと生き，幸せに逝く」。また第 2 テーマは「癒」であり，会場では，リンパドレナージやタイ式マッサージなどの体験コーナー，絵画展やコンサートも設けられており，学会に参加していた医療関係者も大いに癒されていた。

緩和医療の光と影

小山富美子氏（近畿大学医学部附属病院），恒藤暁氏（大阪大学）が座長を務めたワークショップ「緩和医療の光と影」では，5 病院の緩和ケアチームの取り組みが紹介され，その成功事例のみならず葛藤や課題も語られた。

緩和ケア医やがん性疼痛認定看護師，薬剤師などで「病棟密着型サブチーム」を結成した成果を発表したのは高山敬子氏（東京女子医大）。鎮痛剤を適切なタイミングで使用できるなど，症状の変化に対応しやすくなり，患者の安心感の向上にもつながったという。

雨宮陽子氏（高岡病院）は，在宅移行患者に対する自宅訪問と地域連携パスを活用したチーム活動を紹介。また，西森亜貴氏（KKR 高松病院）は，「緩和ケアチーム」という名称を「がん治療サポートチーム」に変更してコンサルテーションを多職種からも受け付けるようにしたところ，看護師からの介入が大いに増加し，職員からの患者ケア満足度が上昇したと報告した。

成人と小児の緩和ケアチームの比較検討について発表したのは多田羅竜平氏（大阪市立総合医療センター）。小児では，成人と比較して疼痛などの症状緩和よりも患者本人や家族への精神的なサポートのニーズが多く，より多職種的なアプローチが求められるとのことであった。

一方，緩和ケアチームと主治医の意見の食い違いによる葛藤を語ったのは國末充央氏（倉敷中央病院）。発表後の質疑応答でも，コミュニケーションの難しさや，そこから患者に不利益が生じることへの懸念について多くの意見が寄せられた。

ワークショップ全体を通して，緩和医療の「影」の部分としては，医療者間の対立や患者の不安感など，対人関係の困難さから生じる葛藤が多く聞かれた。患者によりよいケアを提供するためにも，看護管理者が医療者間，そして患者と医療者間の橋渡しをしたり，看護師たちの意見を他職種に伝えたりするなど，円滑な人間関係に寄与する必要性が感じられた。

カナダ，北米の緩和医療の実践

カナダで緩和ケアを実践している樽見葉子氏（カナダ・アルバータ大学）によるインターナショナルセッションは「カナダ，北米の緩和医療の実践 —— コンサルテーションの役割と実際」と題して行なわれた。カナダの緩和医療は教育病院で始まったため，緩和ケアチームによるコンサルテーションはスタッフへの教育的意味合いも強く，日常的に行なわれるという。

緩和ケアにおいては，病歴だけでなく，患者の社会のなかでの立ち位置，病態への理解度や最期に際しての希望まで聞き出し，理解することが大切であるという。同じ症状でも治療や対応が千差万別となるため，その結論にいたるプロセスまで患者と医療関係者が共有することで，効果的に苦痛の緩和や在宅ケアへの移行ができると樽見氏は語った。

また，樽見氏は，せん妄によりコミュニケーションがとれなくなる，過剰使用により逆に痛覚過敏を引き起こしているなど，オピオイド使用の課題についても言及した。他の鎮痛薬への切り替えをめざす場合も，州によるカルテ情報管理のような医療関係者間での情報共有は，薬の相互作用による事故を防ぐのに役立ったという。

患者の苦痛軽減を絶対的な目標とし，そのために患者，家族，医療関係者がしっかりと情報を共有して患者の希望を知り，それを満たすことが大切であるとの内容，また，日本と北米の医療環境の違いは，参加者にとって非常に興味深いものであった。

今学会では，病院などでボランティア公演を行なっている NPO 法人キャトル・リーフによる音楽劇『葉っぱの四季　フレディ』（原作＝レオ・バスカーリア『葉っぱのフレディ』，原作・脚本＝日野原重明氏〔聖路加国際病院〕）も上演された。葉っぱの一生とそれをとりまく人々の生と死，悲喜を織り交ぜた感動的なストーリーがクラシックに乗せて伝えられ，満員の会場内は静かな感動に包まれ，涙を流す人も多くいた。

（本誌編集室）

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/11/11 09:31:57